

平和のバトン

～被爆体験者の体験談を聞いて～

石川県教職員組合

山崎 弘人（やまざきひろと）

野々市市立富陽小学校

研究の内容

1. はじめに

私は、2009年5・15沖縄平和行進、2010年原水禁広島大会に参加したときに、沖縄戦体験者、ヒロシマの被爆体験者の方々に体験談を聞く機会があった。私自身、戦争や核兵器がいかにも恐ろしいものであるかを認識することができた。「平和な世界を実現するには、戦争や原爆の悲惨な体験を次の世代に継承しなければいけない。」と、どの体験者も必ず話していた。

今日、子どもたちの祖父母は戦争を知らない世代が多くなっており、戦争体験者の高齢化によって、子どもたちにとって戦争の話を知る機会がほとんどなくなり、悲惨な体験が風化していきつつある。そして、学校教育現場では、これまで経験豊富な先輩の先生方が平和教育を推進してきたが、実体験として戦争を知らない私たちの世代が、実践を引き継いでいかなければならないという必要が出てきた。

私は、昨年度の4月に異動になり、この学校の平和のとりくみの担当者2人のうちの1人となった。どうすれば、子どもたちに平和について深く考えさせることができるのかを考えた。2011年度、この石川支部から全国教研に出た、中学校の先生の実践が、家族からの戦争体験の聞き取りと、平和集会で戦争体験者(加害側)の方からの体験談の聞き取りを中心としたものだった。真実を生々の声で伝えることで、戦争の恐ろしさや戦時中の生活の苦しさをより現実的にとらえさせ、平和を強く願う心を育て、今後はそれを子どもたち自身が語り継ぐことができるのではないか。私は、「これだ」と思い、もう一人の平和担当者と相談し、戦争体験者の体験談を直接聞き取りすることを中心とした平和教育のとりくみを行おうと決めた。

2. 被爆体験談の聞き取りを中心とした平和教育を提案

戦争体験者を平和集会に招き、1年生から6年生までの子どもたちに語っていただくことができる人を探した。すぐに私は、外部講師(Aさん)を招いて、平和集会を開けないかと思った。前の職場で一緒だった先輩の先生が、Aさんと平和教育を学年で実践していたことを思い出したからだ。Aさんは68年前、当時4歳のときに広島市で被爆し、現在石川県金沢市に住んでいる72歳の女性である。被爆体験を語り継ぐ活動を実践されており、子どもにもわかりやすい明確な言葉で、多くの小学校で語っているということだった。

私は、すぐにAさんを紹介してもらい、平和集会で体験談を語って欲しいとAさんに依頼をしたところ、「語り継ぐことが使命であるから」と快く承諾してくれた。

Aさんと私は、数回打ち合わせをし、どのような内容で平和集会をするのか、どのように体験談を話してもらうかを話し合った。低学年には時間が長くなると集中力が持続しない。しかし、高学年には考えさせられるような踏み込んだ内容にもしたい。そのことを踏まえ、Aさんの被爆体験談を直接聞き取りする平和集会を中心とした平和教育を全教職員でとりくんだ。

3. 平和集会に向けての全校でのとりくみ

①パネル展示

Aさんからは是非「原爆と人間展」のパネルを掲示して欲しいとお願いがあった。これらパネルは、Aさんたち被爆者の団体(被団協)が作ったものであり、原爆の被害や被爆者の苦しみ、「ふたたび被爆者をつくるな」というような思いが込められている。



私は、子どもたちに原爆の悲惨さを伝えるためにも必要と判断し、管理職に相談し、児童玄関前と職員室前の廊下(平和の本コーナー)に計10枚程度を展示した。低学年も見るということを考え、残酷すぎるパネルは展示しなかったが、子どもたちが立ち止まってパネルを見る姿も多く、十分に原爆の惨状が伝わったと思われる。

②委員会の取り組み

委員会の取り組みは、子どもたちから平和を願う心を発信するという、よい機会となるとともに、子どもたちが主体的に平和について考えていこうという学校全体の雰囲気を作り出すことにつながった。

私が担当する掲示委員会の子どもたちは、東京大空襲について、8・6について、佐々木禎子さんと折り鶴について、平和の子ら像についてを調べて新聞記事にした。

図書委員会…平和の本の設置と紹介

放送委員会…お昼の放送で平和の本の読み聞かせと、歌「平和の子ら」の放送

運営委員会…平和集会の運営・進行

音楽委員会…平和集会での歌「平和の子ら」の伴奏

③平和の歌「平和の子ら」と「平和の子ら像」

同じ職場でのもう一人の平和担当者であり、音楽担当でもあるBさんをお願いをし、昨年度までの平和の歌から、「平和の子ら」という歌に変更してもらった。この歌は、石川県に住んでいるAさんたち被爆者の方々が、「平和の子ら像」に込めた思いを未来に語り継ぐために、Cさんに作詞作曲をお願いしてできた歌である。(Cさんは、石川県を拠点とするフォークグループの一員として音楽活動している。)



「平和の子ら像」とは、原爆被害者追悼碑であり、Aさんたち石川県に住む被爆者の方々が中心となり、国、県、市の助成と、多くの県民の募金によって建立されたものである。被爆者や遺族の方々、平和を願うたくさんの方々の思いを未来に伝えるため、金沢市卯辰山の玉兎ガ丘にこの銅像が立っている。

子どもたちへ、「二度とヒロシマ・ナガサキを繰り返してはならない」、「未来への平和を願うバトンを受け止めてほしい」という銅像に込められたAさんたち被爆者の方々のメッセージと同じものが、歌詞の中に込められている。

「平和の子ら」を全校各学級で、朝の会に今月の歌として歌い、朝やお昼の放送でも流した。とても歌いやすいメロディーで、子どもたちは休み時間に自然と口ずさむほど馴染んでいた。

④折り鶴の会

例年行っている折り鶴の会(7/6)で、縦割り班に分かれ、折りづるの折り方を事前に練習した6年生が中心となって、低学年に折り鶴の折り方を教えた。Bさんと、6年生の担任が6年生を指導してくれたおかげで、6年生がていねいに低学年に教えてあげる姿が見られた。

1人1羽のつるを折り、それを縦割り班で1本の糸でつなぎ合わせ、さらに56班全ての折り鶴を1つにつなぎ合わせた。

昨年度までは、折り鶴を地元中学校生徒会にお願いし、広島記念式典に持って行ってもらうていた。しかし、今年度は折り鶴をAさんに託し、毎年7月末の日曜日に金沢市の卯辰山玉兎ヶ丘で開催される「反核・平和おりづる市民のつどい」(7/22)で、「平和の子ら像」にお供えをするということにした。Aさんに託すことで、子どもたちが平和の願いをこめて作った折り鶴によって、他の人々にその願いを発信することをより感じさせたかったからである。

「反核・平和おりづる市民のつどい」の後、昨年度までと同様に、地元中学生に委託し、広島記念式典に持って行ってもらうことにした。

4. 平和集会へ向けての2年1組でのとりくみ

①読み聞かせ

平和旬間(7/3~13)がスタートするとともに、私の担任する学級の2年1組の子どもたちに、まず、本の読み聞かせを行った。「わたしのヒロシマ」を読み聞かせした。読み終わった後に、戦後67年たったということや、ヒロシマだけでなくナガサキにも原爆が落ちたこと、沖縄では地上戦が、いろんなところで空襲があつてたくさんの方が亡くなったことなどを簡単に話した。すると、子どもたちは、戦争は怖い、戦争で被害にあつた人がかわいそうという感想が多かつた。

- ・おばあちゃんやお母さんや子どもも戦争をするなんて、初めて知りました。
- ・こわいかなしいしさびしいしかわいそうでした。
- ・小学生の子ども若いお兄ちゃんも戦争のために訓練をして、そこで命が終わりになってしまふ人もいてかわいそうでした。
- ・女の子はお家を守っていると思っていたのに、女の子も全員訓練をしていたって知りました。
- ・ぼくの時代に戦争が始まったらいやです。

②身近な人からの聞き取りから平和の願いの発信へ

その後、子どもたちの身近な人(祖祖父母、祖父母や父母など)に過去の戦争体験の話や、又聞きでもよいので、戦争があつた頃の様子、食べ物や生活の様子、戦争に実際に行ったこと、被害にあつたことの話を書くという課題を出した。すると、何人かの子は、自身の祖祖父母や祖父母に実際に戦争を体験した話を聞き取りしてきた。実体験を聞けなかつた子どもも多くいたが、たくさんの子が、父母からのまた聞きや、学童の指導員さんからの聞き取りをしてきた。そして、学級でそれぞれが聞き取りしたことを発表した。

- ・ひいおじちゃんは、国から配られた少しのお米と、さつまいもしか食べられなかったの
で、いつもおなかがすいていたそうです。
- ・ひいおばあちゃんは、お米のかすの粉だけのおもちを、まずいのを我慢して、泣きなが
ら食べたと言っていました。
- ・アメリカの飛行機の B29 が飛んできたら、サイレンが鳴って、夜は、爆弾を落とされな
いように、家の電気を全部消していたそうです。
- ・わかい男の人はみんな戦争に行きました。ひいじいちゃんは、フィリピンの島へ戦争に
行きました。残った女の人が田んぼをウマやウシを使って仕事をしました。子どもも裸
足で仕事をしました。
- ・ひいおばあちゃんのだんなさんに赤紙が来ました。だんなさんが戦争に行ったあと、家
族への手紙に「みんな元気か」と書いてあったそうです。次の手紙は、だんなさんが死
んだと書いてありました。家族のみんなは、悲しくて泣いたそうです。

発表をした後、お互いに感想を出し合った。自分や、友だちの身近な人の戦争体験談を聞く
と、戦争が自分たちの住んでいる町でも起こっていたということや、自分たちの祖祖父母たち
も戦争を体験していたということなどから、戦争をより自分たちにとって身近なものとして感
じていた。

- ・戦争がもし起こったら、町がぼろぼろになるから戦争はぜったいしてはいけないと思
います。
- ・おいしいごはんが食べられなくなるからいやです。
- ・お父さんやお母さんと、離れ離れになりたくないです。
- ・たくさんの方が戦争で死んでしまうから戦争はしてはいけないと思います。
- ・家族が死んだら、すごくすごく悲しいです。
- ・ひいおばあちゃんは、もう話せないけど、きっと悲しみを我慢していると思います。
- ・僕はたくさん夢をここで終わりにしたくありません。
- ・まだ生きられる命が、戦争で終わりにになってしまうなんていやです。
- ・戦争の恐ろしさを知りました。もう二度と戦争がないことを願います。
- ・戦争がない、平和な世界にしたいです。

平和の本を読み聞かせをしたときには、戦争は怖い、かわいそういう感想までで終わってい
た子どもたちが、身近な人の実体験を聞くことで、二度と戦争をしてはいけないという思いや、
平和な世界にしたいという願いを感想として話し合うことができた。2年生ではあるが、悲惨
な体験談を聞いたことをもとに、この時点で日本国憲法第9条戦争の放棄について考えていた。

この平和への思いと願いを、2年1組から2年生の他クラスに発信しようと私から提案した。
2年1組での感想の交流からの子どもたちの言葉をもとにして、私が発表のシナリオを作った。
学級の32人が一人ひとりで、全員で読むところを作り、群読にした。そして、平和集会に
来てもらうAさんのことを話すと、Aさんにも発表を聞いてもらおうという話になった。次の日
から毎朝、目標を持ってこの群読の練習をし、平和の歌を私のギター伴奏で歌った。

4. Aさんを招いて開催された平和集会

〈Aさんが2年生に体験談を語る〉

(1) 2年平和集会(1限)

平和集会(7/12)の朝7:30、私は金沢市のAさん宅へお迎えにいた。Aさんは、白地に水色のプリントが入ったTシャツを着ていた。それは、数年前にニューヨークで行われた、核兵器廃絶を訴える平和集会に参加したときのもので、水色のプリントは大きく描かれた折り鶴の絵であった。



学校に到着し、1限目に2年生の学年平和集会を行った。私が子どもたちにAさんを簡単に紹介し、続いてAさんがそのTシャツのことをきっかけに自己紹介をした。Aさんは子どもたちのためにいろいろな演出を考えてくれていた。折り鶴の会で折り鶴を折っていたこともあって、子どもたちは、Aさんの話を興味深そうに集中して聞いていた。

〈2年1組の平和の願いの発信〉



次に、2年1組による平和についての群読の発表を行った。1組の子どもたちは、2~5組までの130人の子どもたちを目の前にして緊張していたが、自分たちの思いを聞いてもらいたいと、練習の成果を発揮し、一生懸命に発表することができた。2年1組の子どもたちにとっては、平和への願いを自分から発信するという、貴重な機会になったと思われる。

続いて、Aさんは、2年1組の発表内容をきっかけに、戦時中の食べ物から着る服など大変だった生活の様子などを体験談として生の声で語った。『ヒロシマでAさんが4歳のとき、1945年8月6日の8時15分の出来事。原爆が爆発したときの瞬間、ものすごい光と爆風に襲われた。母親が自分を抱きしめることで覆って守ってくれた。家の瓦や壁が崩れてしまった。お姉さんが怪我をして血だらけで帰ってきた。町には焼けて亡くなっている人、崩れた家の下敷きで亡くなっている人、全身大火傷をして苦しみながら川に飛び込んだ人がたくさん重なっていた様子など。』2年生の子どもたちにも目に浮かぶように、原爆の恐ろしさ悲惨さをわかりやすく伝えてくれた。

原爆の恐ろしさはその時だけでなく、放射能のために病気を患ったり、大きな病になるのではと不安を抱いたり今でも続き、子どもや孫の世代までもが差別を受け苦しんでいること。「年も近い2歳だった佐々木禎子さんが、爆心地からあまり距離の変わらないところで被爆し、放射能の影響で急性白血病により12歳で亡くなった。もしかしたら、死んでいたのは私だったかもしれない。」「私は、幸いにも命があるから、今でも苦しんでいる人や命を落とした人のために世界中に伝えたい。」と話した。

私は子どもたちに疑問を投げかけた。「67年前にAさんは忘れたくても忘れられないような辛い体験をした。Aさんは思い出すだけでもつらいことを語ってまで、伝えたかったのはどうしてだと思う。」子どもたちに、Aさんの思いを考えさせて、2年生の子どもたち全員とAさんと一緒に「平和の子ら」を私のギター伴奏で歌った。

〈2年生がAさんと一緒に歌う〉



集会の後の2年1組の子どもたちの感想には、平和の願いを発信することができたという達成感と、未来の平和を願う強い気持ちがたくさん書かれていた。

- ・ A さんの話を聞いてももっとも戦争の恐ろしさがわかりました。だから、わたしは A さんが話すときにつらかったんだなと思いました。
- ・ A さんが、戦争の悲しみを我慢して話してくれたから、私たちもがんばらないといけないと思いました。
- ・ 日本はもう戦争をしないと約束をしたから、相手に戦争をやるぞと言われても決して戦争をしてはいけません。戦争で命を無駄にするなんてダメです。日本中の人たちで戦争を止めないとダメです。平和になると日本中の人たちが願うといいです。
- ・ 私が大人になった頃に、「ようし、日本も戦争をやるぞ。」という人が出てきたら、「戦争は、絶対にやらないでください。たくさんの方が戦争で死んでしまうから、絶対に絶対に戦争だけはやらないでください。」と私は言います。
- ・ 私は、卯辰山に銅像をつくった人がすごいなと思います。なぜならその銅像は、もう日本は戦争をしてはいけません。という証拠とわかるからです。
- ・ 私ははずかしかったけどがんばったと思います。歌もがんばって歌いました。A さんが喜んでいたのでよかったです。また「平和の子ら」をいつもよりもっと大きな声で歌いたいと思います。そして、みんなが平和で暮らせたらと思います。折り鶴をいっぱい作って、みんなが平和に暮らせますようにと、願いたいと思います。私は、いつもよりももっとももっとも大きな声で言いたいと思います。そして、みんなで楽しく元気よく暮らして、地球を嬉しい平和の世界にしたいと思っています。

身近な家族からの聞き取りをした後に、A さんの体験談を聞いたことは、ヒロシマでの被爆ということが、より身近なこととして捉え、さらに平和の大切さを感じることができただろう。そして、A さんの思いを聞き、これからも平和の大切さを発信し続けていこうという気持ちになれた子がいたことは、非常に大きな成果であった。

(2) 全校平和集会(2限)

2 限目は体育館に場所を移し、全校で平和集会を行った。司会は、運営委員会が行った。運営委員の初めの言葉の後、DVD「つるにのって」を視聴した。低学年から高学年までいる全校での集会ということで、より伝わりやすい方法ということで、DVD の内容をもとに A さんの体験談で深めていくという形をとった。体育館が暑かったこともあったが、子どもたちは、「つるにのって」の話に引き込まれていた。A さんの話す内容を事前に打ち合わせで聞いておき、体験談に関連する「原爆と人間展」のパネルをステージに同時に映し出し、A さんは、原爆の被害の恐ろしさや悲惨さ、「つるにのって」に登場した佐々木禎子さんについても語った。

その後、運営委員が折り鶴の会で作った折り鶴を、A さんたちが中心となり、平和の思いを込めてつくった卯辰山の「平和の子ら像」にお供えしていただくことを A さんをお願いした。A さんがとっても喜んでいたので、子どもたちは自分たちが平和を願って作った折り鶴が、それを見た人に気持ちを伝えるということが実感できたであろう。

〈A さんに折り鶴を託す〉



〈音楽委員会による伴奏と全校合唱〉



そして、「平和の子ら」を歌う前に、Aさんたちが思いをこめて作った歌であることを紹介し、音楽委員会の伴奏で、「平和の子ら」を全校合唱した。音楽担当のAさんが音楽委員の子どもたちを指導して、ピアノだけでなく、キーボード、アコーディオン、木琴、鉄琴、バスマスター、リコーダー、ドラムなどのたくさんの楽器で、素晴らしい演奏を作りあげていた。そして、全校800人を超える子どもたちの

歌声は、Aさんを感じさせ、涙を流させるほどだった。

Aさんは、「平和の子ら」の歌詞にあるように、「私たち被爆者には語り継ぐのは限界があるから、平和を願うバトンを受け継いでください。」というような未来への希望を込めたメッセージを子どもたちに送ってくれた。

(3) 5・6年平和集会(3限)

3限目には、5・6年生だけで、Aさんの被爆体験についての詳しいお話を聞いた。高学年が対象ということで、お借りしていた「原爆と人間展」のパネルの少々残酷な様子を伝えるものでも、Aさんの思いが伝わると判断し、事前に選択してもらったものをパワーポイントで見せながら体験談を語っていただいた。子どもたちにとっては、原爆の恐ろしさ、悲惨さが印象に残るものとなったであろう。

Aさんが被爆体験をどのような思いで語っているのか、「バトン」を受け継ぐとはということかを、6年生担任とBさんがしっかりと考える視点を子どもたちに与えていた。そのこともあって、Aさんの思いがたくさんの子どもたちにしっかりと伝わっていた。

(4) 集会後の感想

集会後の感想には、平和集会で学んだこと、心に残ったこと、これからの未来のために自ら行動しようということも考えているものが多かった。このAさんの体験談を聞き取りすることを中心とした平和集会が、多くの子どもたちの大きな心の変化を生んでいた。平和集会の後、1から6年生までの平和学習の感想をクラス担任で何点か選んで、児童玄関前に掲示した。

- ①私は、平和とは、戦争を起こさないこと、命を守ることとわかりました。戦争をしても何もいいことはないと思います。だから今日も戦争をしている国の人たちも平和になり、一日も早く平和に暮らしましょうと伝えたいです。禎子さんは死んでしまったけど、禎子さんも心でそう願っていると思います。(2年)
- ②今から67年前、原子爆弾が落ちた時、たくさんの人が亡くなってしまったのは残念です。しかし、まだ戦争があったら今頃僕たちはいなかったと思います。だから、戦争で亡くなった人たちの分まで生きてみたいです。(2年)
- ③戦争がどれだけ怖いかわかりました。1人1人が仲良くし合い、助け合うことが大事だと思いました。日本だけが平和だったらいいんじゃないなくて、世界中で戦争が無くなるように仲良くしようと思いました。(3年)

- ④戦争の怖さをまた深く知りました。たった1個の爆弾でヒロシマとナガサキが被害にあったのを知りました。みんなで作ったツルがヒロシマ・ナガサキで悲しんでいる人の願いをかなえてあげられたらいいと思いました。(4年)
- ⑤わたしは、平和について色々考えました。1番心に残ったことは、あの夏の日に起こった出来事は忘れてはいけないということです。原爆の被害にあわれたAさんに本当の話を聞きました。私が思っているよりもずっと怖いだろうなと思いました。平和集会を機会に、平和というものは、どれだけうれしいものか考えられてよかったです。(4年)
- ⑥私はそんなに平和のことを考えたことがありませんでした。だけど、もう二度と戦争は起こしたくないと思いました。日本では、世界に「もう戦争はしない」と誓ったけど、未来の人たちが「戦争をしよう」と言ったら、誓った意味が無くなってしまう。私が大人になったら、みんなに「戦争はダメだよ」と伝えたいと思いました。(4年)
- ⑦私は、「平和」とは、1人1人が生きていて、その1人1人が幸せでないと作れない思いました。折り鶴は、自分たちだけでなく、地球すべての人々が戦争をやめ、平和な毎日を過ごしてほしいという願いが込められているものだと思います。たった1つの爆弾で、ヒロシマやナガサキの人々が亡くなったけれど、私たちはその人たちの思いを受け継いで、命を大切にしていかなければならないなと思いました。(5年)
- ⑧私は、Aさんの話を聞いて、戦争をしてはいけないと思いました。爆弾とかは地球にあってはダメなものだとわかりました。いつも朝歌っていた「平和の子ら」の歌詞の意味や、伝えたいことがわかりました。これから戦争している国が減って、平和が続いてほしいです。(5年)
- ⑨Aさんの話を聞いて、Aさんはお母さんに必死の思いで守られていたことがわかりました。でも中には、建物や家の下敷きになって、助けたくても助けられない人がいたということを知って、とてもかわいそうだなと思いました。放射能を浴びてがんになったり、病気になったり、体が不自由になった人もいたと聞くと、恐ろしいと思いました。
- Aさんが言った「バトンを受け継いでいってください。」と言ったことや、私たちになぜこんな話をしてくれたのかもわかりました。Aさんは、本当の原爆に遭っていて、戦争がどんなに怖いものかも知っているのだから、戦争の怖さや悲しさを多くの人に感じてほしい、分かってもらいたいという気持ちがあったからだと思います。私は、大人になってからも、広島であったことを忘れずに、多くの人(子どもたち)に教えたいと思います。そして、どんどんバトンを受け継いでいけるといいと思います。(6年)
- ⑩平和集会の後、5・6年生だけにAさんが話をしてくれました。その時にAさんの家族が亡くなってしまったという話をしてもらって、それが自分だったらと思うと怖いです。でもそれが本当に起きてしまったAさんは、もっと悲しくて、もっと怖かったらうなと思います。家族の中で一番元気だから感謝しているとAさんは言いました。私だったら生きてよかったですしか思えないかもしれません。なのでAさんはすごいなと思いました。
- バトンを受け継ぐということは、Aさんが話してくれたこと、平和集会で感じたことなどを次の世代の人々に伝えていくということだと思います。あと世界の核兵器たちをなくす、つくらないということだと思います。(6年)

⑥ ぼくは、平和集会を終えて思ったことは、戦争があったことは決して忘れてはいけないことだと思った。Aさんが、家の下敷きになった人が生きてまま火事で焼かれるのを見たときにどんなに悲しく、あの時のことを思い出さずだけで、どんなに辛いのかということがわかりました。Aさんの家族はみんな放射能にあつて、Aさんだけが元気と言っていた。本当は、あの場では言っていなかったけど、心の中では、すごく辛く悲しいと思っているだろうと思った。

「バトン」を受け継ぐとは、決してこのことは忘れてはいけないということと、未来の子どもたちに伝えていくということだと思ふ。もしこのことを伝えなければ、またあのような戦争が起こり、亡くならなくてよかった人が亡くなるから、「バトン」を伝えていかなければだめだと思ひ、ぼくもこんなことが起きないように、力になればいいなと思つた。

DVDを見て感じたことは、DVDでもあんなに迫力があり、少し鳥肌が立ちました。広島原爆資料館では、人の影や、焼けた自転車があつて、広島や長崎を一発で爆発させる怖い爆弾についてもっと見たり知ったりしたいと思ひ、機会があれば行ってみたいと思つた。

⑥戦争がこんなにも怖いとは、知りませんでした。「平和の子ら」を全校合唱するときに楽器を弾きました。ぼくは、少しでもいいので感謝の気持ちが伝わるように弾きました。結果、泣くほど喜んでもらったので、うれしかったです。

Aさんのお話では、戦争とは、ひどく悲しいものだと思ひました。僕は、戦争をしている人々は、人の命を何とも思わないのかなと思ひました。戦争は、家族を失ひ、友だちも失ひ、身近な人を失うのでイヤだ。死者や負傷者を相手の国だけでなく、自分の国にまでだしてまでも、戦争をする必要とは何か、それが不思議です。

バトンを受け継ぐとは、戦争はこんなにも罪悪でひどく、もう二度としてはいけないということ伝えることだと思ひます。これからは、「命」と「自分」を大切に生きていきたいです。最後に、Aさん、ありがとうございました。このことを知って自分は何をすべきかがわかりました。このことを知り、知らせ、この世の中から戦争をなくし、命を大切にしていきたいです。

体験者の肉声による語りかけ、合わせて当時の写真などを子どもたちに見せたことで、戦争の恐ろしさや戦時中の生活の苦しさをより現実的にとらえさせ、その悲惨な体験を追体験させることができた。子どもたちの感想の中には、戦争を二度としてはならないということだけでなく、核兵器の廃絶、世界の平和への願ひ、これからも平和学習を続けていこうとする気持ちなど、平和を強く願う心が表れていた。そして、Aさんからのメッセージとして受け取つた平和を願うバトンを、自分たちが未来へ受け継いで、次の世代へ語り継いでいこうとする心が表れていた。

5. 成果と今後の課題

戦争体験者の真実を生の声で聞くことで、戦争の恐ろしさや戦時中の生活の苦しさをより現実にとらえさせ、子どもたちに伝わったものは大きかった。また、Aさんの体験談と、自分たちの歌った歌や、作った折り鶴などがリンクしていたことは、深く平和について考え、平和を願う気持ちを育てることができたであろう。

子どもたちの感想の中には、命を大切にする。仲良くする。という自分たちにすぐできることを書いている子もいた。平和教育をただの知識で終わらせることなく、日頃からの実践的態度につなげていくことが大切であることを私も学ぶことができた。子どもたちがこの学びを通して、話し合いによるトラブルの回避することや、年下の子や障害がある友だちに優しく接することなどを日頃より学んでいけたらと考える。

これからも、この学習がさらに深まっていくものにできるよう、これらの感想を保管し、今後のとりくみにつなげていきたいと考える。

6年国語科「平和のとりでを築く」、3年生「ちいちゃんのかげおくり」、4年生「一つの花」、6年社会科「戦争を体験した人々の暮らし」、「日本国憲法」の学習と関連させながら、今後も全職員で平和学習を続けていきたいと考える。

ヒロシマ・ナガサキが、現在のフクシマの問題、原発問題につながっていることや、尖閣諸島・竹島諸島の領土問題についてなど、戦後についての平和教育と結び付けること、11.3、12.8、3.10、3.11などの節目の日や、現代の世界情勢のニュースについて話す機会をもち、日頃から平和について考えさせていきたい。

今年度は、富山県で空襲に遭った方の体験談を聞く平和集会を8月6日全校登校日に開く提案をした。この平和集会を中心とした平和の取り組みを行っていく。

私は、実体験として戦争を知らない世代であり、まだまだ過去の戦争についてあまり知らない。しかし、戦争体験者と子どもたちをつなぐことや、子どもたちと共に平和について学んでいくという姿勢で、これからも子どもたちに未来の平和をつくるための種まきをしていきたいと思う。

「平和の子ら」

**1. 青い空の下 木にかこまれた公園
色とりどりの千羽ヅルに つつまれて
両手でおいヅルを高くかけた
子どものどうぞうが立っている
わたしたちはもう長くはないからと
れきしをきざみ きぼうをたくした
ヒロシマナガサキを生きぬいた人たちの
なみだとやさしさが このどうぞうになった**

**※子どもたちよ わすれないでほしい
あの夏の日のできごとを
子どもたちよ うけとめてほしい
平和をわがうこのバトン**

**2. 千羽になればなあとしんじて
ヅルをおいつづけたヒロシマのしょうじょ
わたしたちは何ができるのだろう
「かく」がきえるその日まで
子どもたちがささげた千羽ヅルよ
海をわたってとび立て世界へ
雨の日にも雪ふる日にも
平和の子らは立ちつづける**

**※くりかえし
平和をわがうこのバトン**